

デマ・偏見 情報が特效薬

新型肺炎

現場から 下

房総の港町から人影が消えた。千葉県勝浦市。街の様子が一変したのは、「勝浦ホテル三日月」が、新型コロナウイルス感染症の蔓延する中国・武漢市からの帰国者を受け入れた1月29日のことだった。

「感染者がせきをしながらうろうろしている」。デマが市民を不安に陥れた。

隣の鴨川市では31日、同市や周辺の自治体職員100人が市役所を集っていた。感染した帰国者の治療を担う市内の亀田総合病院が提案した説明会。「正確な情報を共有したい」。感染症専門の細川直登医師はそんな思いだった。きっかけは職員の子どもへのいじめ。差別と偏見の広がる兆

竹灯籠の前で帰国者を手を振る勝浦市民（2月11日、千葉県勝浦市で）



で陰性だった人。健康観察をしている。病気でない人を強制的に入院させられない――。

何人もがうなずいた。終了後は、語らいながら会場を出る人も多かった。

「感染症の流行のように目に見えない災害ほど人は過剰反応する。わからないからこそ怖いと感じ、患者や関係者の迫害につながりやすい」。災害・リスク心理学が専門の広瀬弘忠・東京女子大名誉教授は分析する。

派遣医療チームの医師らが差別にさらされた。派遣に応じたことを上司にとがめられたり、子どもの保育園から登園自粛を求められたり。日本災害医学会は22日、抗議声明を出した。

過剰反応に陥らないよう心を支えてくれるのが情報だ。講演から数日後、地元に変化があった。ホテル前の砂浜に「まけるな」の文字が見つかった。呼応するように、竹灯籠3000個で励ます人も。集まった約100人が客室に手を振ると、帰国者もカーテンを開けて応えた。企画した男性(45)は「何もわからなくて不安だったのが、情報が入ってきて安心した」と話した。

政府は対策の基本方針で、重要事項の第一に国民への情報提供を掲げた。感染症との闘いの行方は、一人一人の行動にも左右される。納得のいく正しい情報が適切な行動の基礎になる。（社会部 坂本早希、医療部 中島久美子、利根川昌紀が担当しました）

しが見え始めていた。

2月3日、今度は勝浦市の依頼で細川医師が講演した。市民400人が詰めかけた。大半がマスクを着け、視線は険しかった。

説明を終えた後の質疑で、こんな声が上がった。

「なぜ病院ではない施設で受け入れているのか。病院に入れればいいのでは」

細川医師は説いた。ホテルにいるのは、事前の検査